

Constant J. Mews,
Abelard and Heloise,
 Oxford University Press, 2005, pp. xviii + 328.

永 嶋 哲 也

1999年、本書の著者 Mews 氏が編集し出版したある本にわれわれアベラール研究者は当惑させられた。それは *The Lost Love Letters of Heloise and Abelard*¹⁾ [以下 *The Lost Love Letters*] と題された書物で、内容は 12 世紀前半のフランスで匿名の男女が交わした恋文の校訂と対訳である。男性は学僧で、相手はその教え子と目される非常に学識のある若い女性である。そして Mews 氏はこの手紙の書き手をアベラールとエロイズであると判断したわけである。しかしまさか、アベラールとエロイズなどという超有名人の今まで知られていなかった書簡が 20 世紀もいよいよ終わるところになって出てくるとは容易には受け入れがたい。ところが、この二人の文章であると判断したのは、今日のアベラール研究者としては屈指の人物である Mews 氏である。もし彼の手によるものでなければ人々は眉に唾をつけ、真剣に検討しようとしなかったかもしれない。いや、実際、この書簡がアベラールとエロイズのものではないかと最初に世に問うたのは Mews 氏ではなく、1974 年の Ewald Könsgen²⁾であったが、ほとんどの学者は注目しなかった。

現在に至るアベラール研究が、1979 年に行なわれた生誕 900 年記念のコロキウム³⁾をきっかけとして大きな進展を見せているというのは衆目の一致している所である。そのような研究進展の成果が、前世紀も終わりに近づいたあたりからまとめられ公刊されてきた。歴史研究に重点があるものとしては 1997 年 Clancy の *Abelard* が、思想研究に重点があるものとしては 1999 年 Marenbon の *The Philosophy of Peter Abelard*⁴⁾ が、特記されるべきものであろう。しかし、両者は *The Lost Love Letters* 以前である。その後、2004 年に *The Cambridge Companion to Abelard*⁵⁾ も出版されているが、文献表に *The Lost Love Letters* の記載はあるものの、ほとんど論じられていない。2003 年に James Burge というテレビ脚本家書いた伝記⁶⁾を例外として、*The Lost Love Letters* はほとんど取り上げられていない。おそらく研究者たちはその

扱いについて態度を決めかねていたのではないだろうか。本書の持つ意味は上記のような状況の中で理解されねばならない。つまり *The Lost Love Letters* の編者であり、今日のアベラール研究の第一人者でもある著者が、ここまでの研究の蓄積と、*The Lost Love Letters* の内容とをふまえ書いたアベラールとエロイズに関する研究書が本書なのである。

アベラールとエロイズと言えば、日本の読者は、ジルソンによる概説書、もしくはそれに加えてフマガツリの概説書⁷⁾を思い浮かべるだろう。しかし本書は *Abelard and Heloise* と銘打たれていても、それらの先行書とは少々趣を異にしている。それを象徴的に表わしているのが、*Great Medieval Thinkers* というシリーズの一冊として本書が出版されているということである。つまり、思想家という側面からアベラールだけでなくエロイズも描き出そうという試みなのである。

本書の第1章は、アベラール（とエロイズ）がどのように受け取られ、描き上げられてきたかの変遷が語られる。言うまでもなくアベラールは論理学者（言語哲学者）であり神学者であり、倫理学者であったのだが、彼の存命中から「不遜にも神学に首を突っ込んだ論理学者」という仕方理解され、アベラール自身「論理学の故に世間から憎まれている」と認めざるを得なかった。そのようなレッテルを貼るのに中心的な位置を占めた人物（言うまでもなくクレルヴォーの聖ベルナル）が教会内の重要人物で後世への影響力も大であったことがこのレッテルの流通を促進した。本書によれば Cousin や Migne などを偉大な例外として、研究史のほとんどを通じてアベラールは倫理学者でも神学者でもなく論理学者として取り扱われてきた。つまり論理学者としてのアベラール像と神学者としてのアベラール像とは断絶していた。しかし Jolivet や Luscombe⁸⁾あたりから研究状況は変わってゆき、既述の Clanchy や Mar-
enbon の研究がアベラールという個人を全体として捉えようという試みだとして著者は高く評価している。しかしより大きな断絶は残っている。つまりジャン・ド・マンから近代のロマン主義へと受け渡されたアベラール像、つまりエロイズの恋人である限りでのアベラールである。アベラールの学問的関心が転換する際、あるいは思索が飛躍的に深まる際に、そのきっかけとなり導き手となったのがエロイズであるという仕方思想家としてのエロイズを評価し、断絶したアベラール像を一つの姿として描き直そうと本書において試みられている。

2章以降、本書は時間的順序に従ってアベラールの各時期の思想や背景を検討して

ゆく。まず2章はアベラールと彼の教師たち、つまりロスケリヌス、シャンポーのグイレルムス、ランのアンセルムスについて論じられる。文献上の新しい発見や最近の研究動向をふまえ、アベラールが自分自身で認めている以上に教師たちに負っているものがあることを論証している。3章は『弁証学』の検討である。各巻の概要を紹介しながら、後の思索との比較検討なども行なわれる。

4章でエロイズとアベラールとの間で交わされた議論が取り上げられ、論じられる。1115年、アベラールと出会ったエロイズは通説では十代前半、つまり14歳くらいだっただろうと言われているけれども、Mews氏はそれを否定し、21歳前後だったと推定する（ちなみに出会いについても、『災厄の記』で偽悪的に書かれているようなアベラールからの接近ではなくて、むしろエロイズの方が学問上の教えを乞うたのであろうと推測している）。そして、*The Lost Love Letters* に収められている書簡 (*Epistolae duorum amantium*) がこの二人の手によるものだとすることを示してゆくのだが、著者の論証は充分説得的であり、これらの書簡がアベラールとエロイズによるものだとすることはまず間違いないと言ってよいだろう。そして二人の間に戦わされた議論から得られるいくつかの結論はこうである。そもそもエロイズの方が詩の中でローマ古典的イメージと宗教的イメージとの結合を試みたのであって、つまりアベラールの古典作品への関心はエロイズに端を発する。また彼女は愛について哲学用語を用いて論じようと試み、キケローの *amicitia* を援用している。それに対して当時のアベラールにとって愛は理性を失わせる激情であり、『災厄の記』にも書かれていたように哲学の妨げとして位置づけられていた。だが彼女の発想が後の『*Scholarium* 神学』で *amor honestus* と *cupiditas* の区別という形で結実してゆく。また彼女は言語や行為の背景にある意図に着目し、意図の正しい愛はたとえ肉体関係を伴っている場合すら罪ではないと論じる。この論点も彼の晩年に書かれた諸倫理著作において罪の理論と結実してゆくことになる。

5章は『*Ingredientibus* 論理学』、6章は『*Summi boni* 神学』、7章は『キリスト教神学』の概要を紹介しつつの検討である。6章ではソワッソン教会会議についても論じられる。

“*Heloise and the Paraclete*”と題される8章では、エロイズがパラクレーに移る前と後の時期が扱われる。すなわちアベラールはエロイズの質問や詰難に答える中で真の愛・友愛の理解が神学的にも深まったのだと示すために、『災厄の記』の前

後の時期が問題にされる。『災厄の記』においてアベラールはエロイズとの恋愛を無私の愛ではなく、肉欲の罪としてしか表現していない。『災厄の記』において彼はいかなる地上的愛にもまさる聖霊の善性について読者（とりわけエロイズ）の思いを導きたかったのだろう。だが、そのような理解に対してエロイズが納得するはずもなく、彼女の異議に応答してゆくなかで、真の愛・友愛は歴史上のキリストにおいて明示されたのだというものに深化してゆく、と。

9章、10章においては、その後の神学・倫理学上の深化を著作の成立順を確定しながら考察してゆく。9章においては『対話』『ロマ書注解』『ヘクサエメロン注解』などが、10章では『Scholarium 神学』『汝自身を知れ』などが、サン・ヴィクトルのフーゴーを始めとする同時代人たちの神学理論と対照させられながら考察される。そして最終章である11章は、特に異端審議つまりサンス教会会議とクレルヴォーのベルナルドゥスなどが論じられているが、ギルベルトゥス・ポレタヌスやペトルス・ヒスパヌスへの影響なども扱われている。

Mews 氏のこれまでのアベラール研究は文献学から哲学研究の分野にまで及んでおり、そのような守備範囲の広さは本書にもよく現れている。個々の議論、全体的な主張などは単なる思い込みや強引な解釈などではなく、幅広い文献的証拠によって裏付けられている。本書評の最初で、ここ数十年のアベラール研究進展の成果が Clanchy や Marenbon に集約されていると書いたが、本書（と *The Lost Love Letters*）を転換点としてアベラール研究はまた新たな展開時期に入る可能性がある。本書は今までの常識とはかなり違うアベラールとエロイズの姿を描き出しているが、もしかすると十数年後にはまたかなり違った二人の姿をわれわれは知っているかもしれない。

注

- 1) Constant J. Mews, *The Lost Love Letters of Heloise and Abelard: Perceptions of Dialogue in Twelfth-Century France*. New York: Palgrave Macmillan, 2001.
- 2) Ewald Könsgen, *Epistolae duorum amantium: Briefe Abaelards und Heloise?* Leiden: E. J. Brill, 1974.
- 3) *Abélard en son temps: Actes du colloque international organisé à l'occasion du 9^e centenaire de la naissance de Pierre Abélard, 14-19 mai 1979*. Paris: Belles lettres, 1981.
- 4) M. T. Clanchy, *Abelard: A Medieval Life*. Oxford: Blackwell Publishers, 1997.

- John Marenbon, *The philosophy of Peter Abelard*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- 5) J. Brower and L. Guilfooy (eds.), *The Cambridge Companion to Peter Abelard*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- 6) James Burge, *Heloise & Abelard: A New Biography*. London: Profile Books, 2003.
- 7) エチエンヌ・ジルソン『アベラールとエロイズ』中村弓子訳、みすず書房、1987年。マリアテレーザ・フマガリ＝ベオニオ＝ブロッキエーリ『エロイズとアベラール——ものではなく言葉を』白崎容子・伊藤博明・石岡ひろみ訳、法政大学出版局、2004年。
- 8) Jean Jolivet, *Arts du langage et théologie chez Abélard*. Paris: Vrin, 1969; David Luscombe, *The School of Peter Abelard: The Influence of Abelard's Thought in the Early Scholastic Period*. Cambridge: Cambridge University Press, 1969.

Dominik Lusser,

*Individua Substantia: Interpretation und Umdeutung des
Aristotelischen ousia-Begriff bei Thomas von Aquin und
Johannes Duns Scotus,*

Peter Lang, Europäischer Verlag der Wissenschaften, 2006, pp. 251.

福田 誠 二

本書はBaden-Württemberg州のWeilheim-BierbronnenにあるGustav-Siewerth-Akademieに2004年に提出された修士論文に加筆修正が加えられ、Peter Lang出版によって新しく創刊された哲学的叢書『Ad Fontes』の第一巻として出版されたものである。著者であるDominik Lusser氏は2004年現在、Universität Freiburg (Schweiz)のカトリック神学部で研究中の学徒である。著者によれば、中世スコラ学盛期にアリストテレス哲学を受容した代表的思想家であるトマス・アクイナス(1225-1274)とヨハネス・ドゥッンス・スコトゥス(1265/66-1308)とは共にキリスト教神学者として多くの点で共通の基盤に立つ思想家であるが、アリストテレス哲学受容に際して、その形而上学の中心概念の一つである「実体」概念に関しては、両者の理解には大きな相違が存在しているとのことである。本書はアリストテレス由来の、トマスとスコトゥスの「実体」概念の相違とそ